

事業活動実績報告書

施設名	幼保連携型認定こども園そあ
教育理念	1人ひとりが主役になる教育保育 自然の中で全身を使って五感を育む・時間を忘れて遊ぶ・赤ちゃんからお年寄りまで関わり合う生活・ほんものの食事
1 事業名	自然の中で「不」を体験する。
2 実施期間	令和 7年4月1日 ～ 令和8年3月31日

3 取組概要	（取組日） 令和7年5月22日 【タケノコ掘り】 （実施内容） 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 日ごろお世話になっている地域の方の竹林でタケノコ掘りをした。孟宗竹ではなく、真竹であることから、伸びた状態のタケノコを根元から切って収穫した。スーパーに売っている状態とは全く違うだけのことを不思議そうに眺めてみたり、使ったことのない鍬やスコップを使って収穫をしていた。収穫をすると、ペリペリと皮を剥いてみたり、タケノコに生えている毛を触ってみたりと感触を楽しんでいた。 
	（取組日） 令和7年7月3日 （実施内容） 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 満潮のワンドに行き、生き物観察や川の中の感触を楽しんだ。足元がぬかるんでおり、うまく歩けない不自由さを感じたり、水中生物を網で捕まえて観察をした。「うまく歩けないなら浮いたらいいんだ！」とライフジャケットを使ってぶかぶか浮くことも楽しんでいた。 
	（取組日） 令和7年9月18日 （実施内容） 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 7月には水でいっぱいだったワンドも、干潮で生き物探しがしやすくなっていた。「前はぶかぶか浮けたのに！」と「地面が水吸っちゃったんじゃない？」と水がなくなっていることを不思議そうに考察する様子もあった。また、石の下にカニがいることに気づき、一生懸命石をひっくり返してカニを捕まえることを楽しんでいた。 
	（取組日） 令和7年9月 4日 ～ 令和7年 10月1日 【ピザ窯でパン作り】 （実施内容） 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 「ピザ窯でピザしか作ったことがない」という子どもの言葉からパンを作った。まずは大人のやっていることを見様見真似で作ってみることで、うまく焼くことができた。その後自分たちの力で作ってみるんだと挑戦するが、分量などが難しくなぜかうまくいかない。うまくいった体験から、どうしたらもう一度うまく作れるのかを一生懸命考えて挑戦していた。 

(取組日) 令和8年1月6日 【草木染め】	
(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 柿の葉が落ち始めたころ、火起こしも盛んに行われていたため、子どもたちと草木染を体験した。鍋を使って煮だしている時は茶色くなっていたものが、媒染する素材によって色が変わる様子を観察したことから、「なぜ色が変わるのか、不思議に触れていた。	
(取組日) 令和7年10月23日 【作業場作り】	
(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 子どもたちが木工をするにあたり、のこぎり等の工具を使用するため作業場を作った。単管を持ってみたときの重さやねじを回す難しさ等を感じながらも、木工をするワクワクを力に、友達・職員と一緒に作業場を作った。	
(取組日) 令和 年 月 日 ～ 令和 年 月 日	
(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	写真添付 (区HPで公開が可能な写真を添付してください) 活動内容が分かるもの 取組に関するもの
(取組日) 令和 年 月 日 ～ 令和 年 月 日	
(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	写真添付 (区HPで公開が可能な写真を添付してください) 活動内容が分かるもの 取組に関するもの
(取組日) 令和 年 月 日 ～ 令和 年 月 日	
(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	写真添付 (区HPで公開が可能な写真を添付してください) 活動内容が分かるもの 取組に関するもの

効果検証報告書(継続事業用)

施 設 名		幼保連携型認定こども園そあ				
教 育 理 念		1人ひとりが主役になる教育保育 自然の中で全身を使って五感を育む・時間を忘れて遊ぶ・赤ちゃんからお年寄りまで関わり合う生活・ほんものの食事				

事業の区分(5領域)	幼稚園教育要領に示された5領域に該当するもの(複数可。最も当てはまるものには◎を選択してください)									
	健康	〇	人間関係	〇	環境	◎	言葉	〇	表現	〇
1 事業名	自然の中で「不」を体験する。									
2 事業概要	これまでの教育・保育活動を通じて、葛飾区内での自然体験活動において、子どもたちが自然の中で「不」を体験することの重要性を実感しました。「不」とは、不便さや不確実さを指し、子どもたちが自然の中で直面する予測できない出来事や困難を意味します。園内の自然の中でできる「不」の体験から、その「不」をさらに深く体験するために、園外の水辺や水元公園など、より大きな自然に触れ、様々な「不」を体験できる機会を広げていきます。例えば、区民農園や水元公園、西水元水辺の公園のワンドなど、葛飾区内の身近な自然環境から始め、必要に応じて区外に出て「不」を体験できる機会を創出していきたいと考えています。 こうした体験は、子どもたちにとって非常に貴重な学びの機会であり、雨や台風などの予測できない天候の変化や、不便な環境の中での活動を通じて、子どもたちは自然と共生する力を育みます。こうした環境での遊びや学びを通じて、子どもたちは自ら考え、解決策を見つける力を身につけ、子どもたちの興味関心を広げ、社会への関心の基礎を築くことに繋がると考えています。									
3 対象学級(クラス名) 対象人数	(クラス名: 3歳以上)							60 名		
計画時	4 実施体制	取組に必要な環境(人員、事業の遂行に必要な技能やノウハウ等)の保有状況								
		・建築士(主幹教諭、用務) ・保育、園児指導(幼児クラス担任、散歩見守り職員)・外部講師(カワセミの里自然観察員、環境カウンセラーとして葛飾区生物多様性推進協議会委員、緑化推進協力員、3R推進パートナー、NEALリーダー、レスキュー3資格取得者 ・国際救急救命資格MFAの全職員の受講・修士号取得職員・ユンボ資格取得者・国際MFAインストラクター資格者								
事業後	4についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等								
		本事業は、自然環境における「不(不便さ・不確実さ)」を含む活動を安全かつ継続的に実施するため、園内外の多様な専門性を有する人材による体制のもとで実施した。園内では、建築士資格を有する職員や用務職員が環境構成を担い、幼児クラス担任および散歩見守り職員が日常の保育の中で活動を支えた。また、全職員が国際救急救命資格(MFA)を受講していることに加え、レスキュー3資格取得者や国際MFAインストラクター資格者が在籍しており、自然環境におけるリスクを予見・回避しながら活動を成立させる体制を整えている。 さらに、外部講師としてカワセミの里自然観察員や環境カウンセラー等の専門家と連携し、自然環境に関する専門的視点を取り入れた活動を展開した。特に、カワセミの里自然観察員が行った活動については、これまでの取り組みが評価され、河川財団より環境大臣賞を受賞している(昨年度実績)。本年度においても同様の実践を継続し、その内容について実践発表を行うなど、活動の質の維持・向上と社会的な発信の両面に取り組んだ。 これらの体制により、本事業では、危険を回避するだけでなく「リスクを扱いながら活動を成立させる」ことが可能となり、水辺環境や不整地など、これまで実施が難しかったフィールドでの活動が実現した。また、専門性を有する職員による実践の言語化と共有が進んだことで、活動の属人化を防ぎ、組織としての再現性と継続性の確保につながっている。								
計画時	5 事業のねらい	本事業は、法人の教育理念に掲げる4つの柱「自然の中で全身を使い五感を育む」「時間を忘れて遊ぶ」「赤ちゃんからお年寄りまで関わりあう生活」「ほんものの食事」を、日々の保育の中でどのように具体化していくかに向き合う取組であり、子どもが体験の中で自ら関わりながら育っていく環境を整えていくことを目的としている。 現代社会においては、都市化の進展やライフスタイルの変化により、自然と関わる機会や人と人との関係が希薄になりやすい状況があるが、そのような中でこそ、意図的に関わる場をつくる必要があると感じている。実際に自然の中で体を動かし、五感を使って遊ぶ経験を重ねていく中で、子どもが自分なりの関わり方を見つけていく様子が見られ、そこに育ちの過程が立ち上がってくる。異年齢や多世代との関わりについても同様であり、関係は教えられて身につくものではなく、日々のやり取りの中で少しずつ形づくられていくものである。うまくいかないことやすれ違いも含めて、その場にいる他者と関わり続ける経験が積み重なることで、結果として関係の力が育っていくと捉えている。 また、食に関しても、完成されたものを受け取るだけでは見えにくい過程に関わることで、理解が深まっていく。火を扱うこと、素材に触れること、時間をかけて出来上がること、そうした一連の経験を通して、食べることの意味が少しずつ実感を持って立ち上がってくる。								
		本事業の中核に位置づけているのが「不」であり、不自由・不便・不確実といった状況は、自然の中ではむしろ日常的に起こるものである。雨によって地面がぬかるむことや、風によって作ったものが崩れることなど、予定通りに進まない出来事が繰り返し生じるが、それを避けるのではなく、その中でどのように関わるかを大切にしている。 子どもは、うまくいかない状況に出会うと、一度立ち止まりながらも、関わり直そうとする。試しては崩れ、また試すという過程を繰り返す中で、自分なりのやり方にたどり着いていく。その繰り返しの中で生まれる経験そのものに意味があると考えている。 その際に重要な役割を果たすのが道具であり、火起こしといった活動を通して、子どもは自然環境に働きかける手段を得ていく。扱うことは容易ではないが、道具を使うことで環境に変化が生まれる経験は、自分の関わりが状況を変えていくという実感につながっている。 こうした経験は特別な活動として切り出されるものではなく、日常の中で積み重なっていくものであり、最終的な姿をあらかじめ固定するのではなく、関わりの中で立ち上がってくる変化を丁寧に捉えていく必要がある。そのための環境を整え、関わり続けていくこと自体が、本事業の出発点である。								

事業後	5についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 本事業では、法人の教育理念に基づき、「自然の中での体験」と「不（不便・不自由・不確実）」を含む環境を意図的に設定することで、子どもたちの成長につながる環境の構築を目指してきた。「自然の中で全身を使い五感を育む」という点においては、園外の水辺環境や自然フィールドでの活動を継続的に実施したことで、子どもたちが身体感覚を伴いながら環境に関わる姿が多く見られるようになった。地面の状態や水の流れ、風や気温といった自然条件の変化に応じて行動を調整する場面が増加し、単なる遊びにとどまらず、環境に適応しながら活動する力の育成につながっている。また、「時間を忘れて遊ぶ」という観点においては、活動内容を事前に固定せず、その場の状況や子どもの興味関心に応じて展開することで、遊びが継続・発展していく様子が確認された。特に「不」のある環境においては、思い通りにいかない状況が新たな試行錯誤を生み、結果として遊びが深まる傾向が見られた。 「赤ちゃんからお年寄りまで関わりあう生活」については、地域の自然環境を活用した活動や外部講師との関わりを通して、子どもたちが多様な他者と接する機会が増加した。これにより、自分以外の存在を意識しながら関わる姿や、他者の行動を見て学ぶ姿が見られ、社会性や共感性の育成につながっている。「ほんものの食事」に関しては、自然体験と連動した調理活動や食材への関わりを通して、食べることへの関心が高まり、食材や調理過程に対する理解が深まる様子が見られた。火起こしや道具の使用を伴う活動では、食事が自然環境や人の手によって成り立っていることを実感する機会となっている。 特に本事業の特徴である「不」の体験に関しては、子どもたちの行動に明確な変化が見られた。予測できない状況や不便な環境に直面した際に、すぐに大人の指示を求めるのではなく、自ら考え、試行錯誤する姿が増加した。また、他児と協働しながら解決策を見出そうとする関わりも多く見られ、問題解決力および協働性の向上が確認された。 なお、本事業においては「不」の体験のみを切り出すのではなく、日常の利便性との対比の中でその価値が実感されるよう配慮した。自然環境における不便さの中で、子どもたちは既に知っている「便利な状態」を手がかりにしながら、それを再現しようと試みる姿が見られた。すなわち、「不便の中で便利をマネする」という過程を通して、道具の使い方や環境への働きかけを自ら考え、状況を改善していく経験が積み重ねられている。このように、単に不便さを受け入れるのではなく、既存の経験をもとに工夫しながら環境に適応していくプロセスそのものが、主体性や問題解決力の育成につながっていると考えられる。 加えて、「不」を乗り越える手段としてのノコギリや鎌などの道具の使用についても、単なる操作の習得にとどまらず、「自分はどんなものを求めているのか」「どのように使えば課題を解決できるか」を考えながら扱う姿が見られるようになった。道具を使った活動を通して、子どもたちは自然環境に働きかける手段を獲得し、自らの力で状況を変えていく経験を積み重ねている。 以上のことから、本事業は、自然環境における「不」を教育的資源として活用するとともに、「便利」との対比の中でその意味を捉える経験を通して、子どもたちの主体性、問題解決力、社会性の育成に寄与し、法人の教育理念に掲げる4つの柱の具体的な実現につながったと評価できる。
計画時	6 取組の内容	計画スケジュールを含む詳細な取組内容、経験させたい内容等 ・子どもたちの道具小屋（アトリエ）や生き物を飼育する生簀や、そこで使う棚や机を子どもたちと一緒に作成・設置する。 ・火おこしや、ピザ窯、草木染めなど、自然の中で「不」を体験する。 ・たけのこほりや畑での栽培といった自然の旬の季節でしか体験することができない自然体験を、子どもやその保護者と一緒に体験する。 ・日常の中で、身近にできる自然体験（川遊びや、街歩き）などの体験を重ねて、日常の中で身近な「不」を体験する。 ・水槽等で生き物の飼育したり、収穫したものを食べることで、命を学ぶ 計画スケジュール 2025年4月～2026年3月
		上記のうち、幼稚園教育要領に示された「内容」について、各園で積み重ねてきた取組を発展させた点
		本事業では、子どもが「不」と出会える環境を構成します。 うまくいかない、思い通りにならない、予定がずれる、他者とのズレに直面する。そうした経験を、あえて避けずに受けとめる場を整えることで、子どもの主体性と関係性の力を育てます。 保育室・園庭に加え、区民農園・畑・地域環境といった開かれた空間を活用し、「正解のない環境」を意図的につくります。たとえば、ぬかるんだ畑や倒れた竹、収穫の待ち時間、思うように燃えない焚き火など、“不”の体験は、子どもにとって工夫や対話のきっかけとなります。 整いすぎない・予定調和ではない環境にこそ、子どもは本来の力を発揮します。素材や道具も、自由に試し、時に失敗しながら関わるができるよう配置します。保育者は先回りせず、子どもと環境との出会いに寄り添う姿勢を大切にし、「不」が新しい関係や意味に“変わる”瞬間を支えています。
		（継続事業のみ記入）前年度の取組から発展させた点 これまでも自然体験を通して、自然の中で直面する「不自由さ」や「不便さ」といった「不」の体験を大切にしてきました。自然の中で「できない」「うまくいかない」と感じた経験が、子どもたちの考える力や工夫する力を育んできたと考えています。 本事業では、これまでの自然体験をさらに発展させ、「0から1を生み出す」ことまで意識をむけ、ノコギリや小刀といった道具の使い方を知り、自然素材を加工して自分たちの手で形を作り出す経験を大切にしていきます。木を切り出し、削り、組み立てることで、素材から道具を生み出す力を育て、ものづくりの達成感や工夫する楽しさを実感できるよう取り組んでいます。

事業後	6についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 本事業では、2025年4月から2026年3月までの期間において、自然環境の中で「不（不便・不自由・不確実）」を体験できる活動を、日常の保育および園外活動の中で継続的に実施した。 具体的には、子どもたちが主体的に関わる活動として、道具小屋（アトリエ）の作成を子どもたちと共に行った。完成されたものを与えるのではなく、材料の扱いや工程を自分たちで経験しながら進めることで、思い通りにいかない状況に向き合い、試行錯誤する姿が見られた。こうした過程を通して、道具の扱い方だけでなく、考えながら進める力や仲間と協力する力が育まれている。 また、生き物の飼育については、水槽を用いた日常的な関わりの中で、幅広い年齢の子どもたちが世話や観察を担った。継続的に関わることで、生き物の変化に気づく姿や、他者への配慮が生まれるなど、命に対する理解が深まっている。 火起こしやピザ窯での調理、草木染めといった活動においては、自然の中で思い通りにいかない状況に向き合う機会を意図的に取り入れた。火がつかない、色が出ないといった経験は、子ども同士の対話や新たな工夫を生み出し、「不」を乗り越えようとする姿につながっている。 さらに、たけのこ掘りや畑での栽培など、季節に応じた自然体験については、子どもだけでなく保護者も参加する形で実施した。活動を共有することで、子どもたちの経験が家庭へと広がるとともに、自然体験の価値について共通理解を育む機会となった。 加えて、川遊びや街歩きなど、日常の中で継続的に行うことができる自然体験を重ねることで、特別な活動に限らず、日々の生活の中で「不」に出会う機会を広げた。これにより、子どもたちは身近な環境の中でも、自ら課題を見つけ、関わり方を工夫する姿を見えるようになっていく。 また、本事業ではこれまでの自然体験を基盤としながら、「0から1を生み出す」経験へと発展させた点に特徴がある。道具を用いて自然素材を加工し、自分たちの手で形を生み出す活動を取り入れることで、単なる体験にとどまらず、試行錯誤を通してものを生み出す力の育成を目指した。木を切り出し、削り、組み立てる一連の過程の中で、子どもたちは達成感や工夫する楽しさを実感している。 以上のように、本事業では、日常と非日常の双方において、「不」を含む状況に子どもが主体的に関わることでできる多様な体験を積み重ねてきた。
	7 環境構成例	本事業では、子どもが「不」と出会える環境を構成します。 うまくいかない、思い通りにならない、予定がずれる、他者とのズレに直面する。そうした経験を、あえて避けずに受けとめる場を整えることで、子どもの主体性と関係性の力を育てます。 保育室・園庭に加え、区民農園・畑・地域環境といった開かれた空間を活用し、「正解のない環境」を意図的につくります。たとえば、ぬかるんだ畑や倒れた竹、収穫の待ち時間、思うように燃えない焚き火など、“不”の体験は、子どもにとって工夫や対話のきっかけとなります。 整いすぎない・予定調和ではない環境にこそ、子どもは本来の力を発揮します。素材や道具も、自由に試し、時に失敗しながら関わるができるよう配置します。保育者は先回りせず、子どもと環境との出会いに寄り添う姿勢を大切にし、「不」が新しい関係や意味に“変わる”瞬間を支えています。
	7についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 本事業では、子どもが「不（不便・不自由・不確実）」と出会うことのできる環境を、日常の中に位置づけてきた。 保育室や園庭にとどまらず、区民農園や畑、水辺などの地域環境も活動の場として取り入れている。いずれも、あらかじめ結果が決まっている場所ではない。状況は変わり続け、予定通りにいかないことが前提となる。その中で子どもたちは、どう動くかをその都度考えることになる。 例えば、ぬかるんだ地面では思うように進めない。倒れた竹はそのままでは使えない。火は簡単にはつかないし、収穫も待たなければならない。こうした出来事は一見すると「うまくいかないこと」だが、実際には子ども同士のやり取りや試行錯誤を生み出すきっかけとなっている。「どうする？」というやり取りが自然に生まれ、関わりが続いていく。 環境についても、整えすぎないことを意識した。素材や道具は用途を固定せず、子どもが自由に試せるようにしている。うまくいかない経験も含めて関わることで、子どもなりの使い方や意味づけが生まれていく。結果として、一つの遊びや活動がその場で変化し続ける様子が見られた。 また、本事業では「不」だけを切り出しているわけではない。日常の中で経験している便利な環境との行き来の中で、その違いが実感されるようにしている。自然の中で不便さに直面したとき、子どもは既に知っている“便利な状態”を思い出し、それに近づけようとする。「不便の中で便利をマネする」ような動きが見られ、道具の使い方や関わり方が具体的に変化していく。 保育者は、その過程を先回りして整えるのではなく、子どもと環境の間で起きていることに目を向けながら関わった。「うまくいかない」状態がそのまま終わるのではなく、別の意味を持つ経験へと変わっていく場面が多く見られている。 こうした積み重ねにより、本事業における環境は、あらかじめ整えられた条件の中で活動する場ではなく、子どもが関わり続ける中で意味が変わっていく場として機能している。

計画時	8 期待される効果 児童の姿	取組を通じて期待される児童の姿や効果等 本事業を通じて、子どもたちは自然体験や道具を使ったものづくりを通して、困難に直面しても諦めずに取り組む姿勢や、自分で解決策を見出す力を育むことが期待されます。自然環境の中で「不」を体験することで、失敗を恐れず挑戦する意欲が培われ、試行錯誤する中で自分なりの工夫を見つけ出す力が身につくと考えています。 また、ノコギリや小刀などの道具を使う活動を通して、「0から1を生み出す」力を育てます。自然素材を加工し、自分たちで形を作り出す経験を重ねることで、達成感や充実感を味わうとともに、自分の手で何かを生み出す喜びを知り、こうしたプロセスは、自己肯定感の向上にも繋がり、達成までのプロセスを大切にする姿勢が身につきます。 さらに、保護者や地域の大人たちと協働する活動を通して、異年齢や異世代の人々と自然体験を共有し、共感や協力する力を育てます。これにより、家庭生活の中でも自然に目を向け、親子で自然体験を楽しむ姿勢が育まれると考えています。
	事業後	事業実績から推測される効果や改善点等 本事業を通して、子どもたちの姿には変化が見られている。 自然環境の中で活動する中で、思い通りにいかない場面に直面しても、すぐに諦めるのではなく、その状況にとどまり続ける姿が増えてきた。火がつかない、うまく形にならないといった場面でも、その場を離れるのではなく、「どうすればできるか」を考えながら関わり続けている。試行錯誤を重ねる中で、自分なりのやり方にとどまり着く過程そのものに意味を見出している様子がある。 道具を使った活動では、使い方を覚えること自体が目的にはなっていない。「何をつくりたいか」「どうすればできるか」を考えながら手を動かす中で、子ども自身の発想が形になっていく。道具を扱いながら素材に働きかけ、自分の手で何かを生み出す感覚を実感している。完成したもの以上に、そこに至るまでの過程に価値を感じていることが伝わってくる。 こうした経験の積み重ねは、「できた」という結果だけでなく、「自分で考えて関われた」という感覚として残っている。活動後の様子や日常の関わりの中でも、自分なりにやってみようとする姿が見られるようになってきた。 また、保護者や地域の大人と関わる場面では、子どもたちの関係の持ち方にも変化が見られる。大人の関わりを見て学んだり、一緒に進めたりする中で、他者の存在を意識したやり取りが自然と生まれている。自分一人で完結するのではなく、関係の中で進んでいく経験が積み重なっている。 さらに、こうした体験は家庭にも広がりを見せている。自然体験をきっかけに、日常生活の中で自然に目を向けたり、親子で同様の活動に取り組んだりする様子も見られるようになった。園での経験が生活の中にもにじみ出ている状態と言える。 以上のように、本事業を通して、子どもたちは困難に向き合いながら試行錯誤を続ける力、自ら考えて行動する姿勢、そして他者と関わりながら学ぶあり方を身につけていく。
9 効果検証総括		事業を通しての感想、今後の教育・保育に向けて 本事業を通して、自然環境の中で「不（不便・不自由・不確実）」に出会う経験が、子どもたちの姿に確かな変化をもたらすことを改めて実感した。思い通りにいかない状況に直面した際に、その場にとどまり続ける姿や、自分なりの方法を探しながら関わり続ける姿は、日常の保育の中でも見られるようになってきている。 また、「不」をただ与えるのではなく、日常の中で経験している利便性との行き来の中で捉えていくことの重要性も明らかとなった。子どもたちは、不便さの中で既に知っている便利な状態を手がかりにしながら、それに近づけようと工夫する。その過程が、単なる体験にとどまらず、自ら状況を変えていく力の育成につながっていると感じている。 こうした取組は、これまでの実践の積み重ねとともに、私の保育記録やビオトープコンクール、ソニー教育財団、河川財団等において評価を受けており、自然体験を基盤とした保育の実践が一定の社会的評価を得ていることも確認されている。これらの評価は結果としての受賞にとどまるものではなく、日々の実践の方向性が妥当であることを示す一つの指標として受け止めている。 一方で、こうした実践は、環境の設定や保育者の関わり方によって大きく左右されるものであり、意図を持って継続していく必要がある。特に、「不」を排除するのではなく扱うという視点を、組織全体で共有し続けることが、今後の課題であると捉えている。 今後は、本事業で得られた実践を一過性のものとせず、日常の保育の中により一層位置づけていくとともに、活動の記録や振り返りを通して、実践の意味や価値を言語化し、職員間で共有していくことが求められる。また、保護者や地域との関係の中でも、このような経験の価値を伝えながら、子どもを中心とした学びが生活の中に広がっていくよう取り組んでいきたい。 本事業を通して得られた知見を基盤としながら、今後も自然環境と子どもとの関係を丁寧に捉え、「不」を含む環境の中で子どもが育つ保育を継続していく。

※必要に応じて、別紙の添付やイラストの活用などにより事業説明を補足しても構いません（別紙は任意様式）。

※幼保連携型認定こども園教育・保育要領における教育のねらいや内容等については、幼稚園教育要領の5領域から構成されていることを踏まえ、本事業では「幼稚園教育要領」とのみ記載しています。